

# 舞踊鑑賞学習の可能性

～想像力喚起のために～

大阪女学院大学 原田 純子  
同志社大学 阪田真己子  
武庫川女子大学 徳家 雅子

## 1. はじめに

舞踊は、動きを媒体とした無言の伝達であるが、作品は、「受け手」の感情を強く動かして、豊かな精神的交流を可能とする(松本 1963)。つまり、舞踊創作活動における鑑賞学習は、他者の個性との出会いの場であり、作舞者と鑑賞者との相互作用を促すだけでなく、「他者への関心」や「気づき」など、広く他者理解へと展開していく。筆者らは、このような舞踊鑑賞学習の可能性を期待し、鑑賞者が主体的に舞踊作品に近づき、受容し、想像性を喚起するためには、指導者がどのように鑑賞学習をプログラムするべきかを検討している。本研究は、その基礎資料として、鑑賞学習において指導者の「言葉かけ」が鑑賞者にどのような影響を及ぼすかを確かめ、舞踊鑑賞学習の可能性を検討することを目的とする。

## 2. 研究方法

### 2.1 対象作品と鑑賞者

M女子大学ダンス部OG 2名に即興で作品を踊ってもらった。二人にはあらかじめ音楽を一度聴いてもらい、5分程度構成についての話し合いの時間を設けた。その即興作品をデジタルビデオで撮影したものを鑑賞学習に用いた。

撮影した即興作品をS女子大学の62名の学生(平均年齢18.6歳, SD: ±0.90)に対し, VTRで呈示した。鑑賞者はすべて女子学生で、そのうち51名の学生が、舞踊・鑑賞ともに未経験であった。

### 2.2 手続き

受講生には、あらかじめ何も教示を与えずに1回目の鑑賞を実施した。VTR終了後、以下の4項目について回答を求めた。

- ① 作品にタイトルをつけなさい
- ② 作舞者は、この作品を通して何を伝えたかったと思うか
- ③ この作品を鑑賞して、あなたが感じたこと
- ④ 何に注目して見ていたかを3つ選び、注目していた順に番号を回答(「動きそのもの」「動きが伝えてくるメッセージ」「顔の表情」「作品の構成」「効果(衣装・小道具・照明など)」「作品のテーマ」(後で1位3点, 2位2点, 3位1点として得点化)

※①～③は自由記述, ④はチェックリストから選択

アンケート記入後、「もう一度同じ作品を鑑賞して、その後同じ4項目について再度回答を求め」旨を伝えた上で、2回目の鑑賞を実施し、鑑賞後アンケートに記入を求めた。

## 3. 結果と考察

### 3.1 作品のタイトル

2回目の鑑賞後、1回目とは異なるタイトルを

書いた者が35名いた。例えば、1回目「2人の空間」→2回目「表と裏, 人間の影」, 1回目「2つの自分」→2回目「自分の中のもう一人の自分」というように、1回目のタイトルを基点として、2回目のタイトルを展開させた内容が複数見受けられた。

### 3.2 踊り手が伝えたかったこと

1回目の鑑賞後は「自由」「喜怒哀楽」「しなやかさ」など、動きから感じられるイメージを端的な言葉で回答する者、また「よくわからなかった」と答えた者が多く見受けられた。2回目の鑑賞後は「表では平静を装っているけど心の中では色んな悩みがあるということ」や「自分ではない“誰か”になりたくてもがき苦しんでいる感じがした」など、懸命に想像力を駆使して作舞者の気持ちに近づこうとしている姿勢が伺えた。

### 3.3 あなたが感じたこと

「考えることによって見えてくるものが全然違った」「一回目よりも色んなところに注目することで、この二人のより深い思いみたいなのを感じることができた」など、指導者が鑑賞の視点を与えることで、新たな見方ができたことを自覚している記述が散見された。

### 3.4 注目していたところ

鑑賞者が選んだ項目について得点化し、項目ごとに得点集計を行った。t検定の結果、「動きそのもの」「効果」の得点が2回目のほうが有意に下がり、「メッセージ」「作品のテーマ」の得点が2回目に有意に上昇した(図1)。鑑賞者の言葉かけにより注目点が“動きの表層”から“作品の内面”へと変化したといえる。

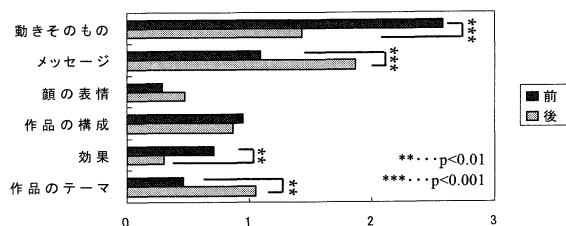


図1 注目箇所の変化

## 4. おわりに

鑑賞者に「作品のテーマ」や「作舞者が伝えたかったこと」等を鑑賞する際の視点として投げかけることで、鑑賞者とその切り口から主体的に考え、想像しようとする姿勢が伺えた。鑑賞者の中には「テーマが知らされてないので何を伝えたいのかわからなかった」と回答した者が数名いた。受験勉強的な唯一無二の回答が存在する学習しか知らない学生にとっては、目の前で起こっている事象に対して、「なぜ？」をゼロから考える力が不足しているのかもしれない。主体的に考え、他者への想像性を喚起する一助となるような舞踊鑑賞学習のあり方を追究したい。

### 参考文献

松本千代栄：舞踊の鑑賞に関する研究；東京教育大学体育学部紀要, pp.74-83(1963)